

黄檗希運の嗣法について

小川 太龍

序・問題の所在

黄檗希運は、ある時托鉢をしていて一老婆に百丈懷海（七四九〜八一四）の名を知らされ百丈に参じたという⁽¹⁾。そして、黄檗は百丈に嗣法する。『祖堂集』⁽²⁾には「黄檗和尚嗣百丈」⁽³⁾と黄檗が百丈に嗣法したとはっきり記載されている。しかし、元刊本『景德伝灯録』〈九〉に付された『伝心法要』以外、管見の限り『伝心法要』の裴休の序は、黄檗と百丈の関係を「西堂百丈之法姪」としており、表現が改められることなく版が重ねられている。ただ誤記を踏襲して来ただけでも考えられるが、疑問が喚起される点である。また、『祖堂集』に「馬大師下有八十八人坐道場。得馬大師真正法眼者、只有一二。廬山是一人。」⁽⁴⁾とあり、馬祖道一（七〇九〜七八八）の真正法眼を嗣いだその人物として自らが師事した百丈ではなく、帰宗智常を挙げることも違和感がある。本論考では、黄檗と百丈の嗣法ということをも黄檗と百丈の機縁を通して改めて考察したい。また、黄檗の嗣法とは、ただ法を継いだということではなく、百丈の弟子筆頭であり、百丈をも超えたという立場が灯史の中では描かれている。そして、百丈に黄檗が参じた時、黄檗自ら語った語として「得見馬祖大機之用」とあるように黄檗の中に馬祖の法があると描かれる。黄檗は「欲

礼拝馬祖去」と語り、また、『祖堂集』(十九)臨済の章には「黄檗和尚告衆曰、余昔時同參大寂道友、名曰大愚。」[78]と、黄檗自ら馬祖に参じたと言っている。先に示したのも合わせ、黄檗と百丈の嗣法を考察する上で馬祖が深く関わっていることは見逃せない。この点も視野にいれ、黄檗と百丈の機縁についてそれぞれ考察してゆく。また、百丈と黄檗の機縁の中には、黄檗と共に百丈の弟子の首であったとされる瀉山靈祐(七七一〜八五三)⁹とその弟子である仰山慧寂(八〇七〜八八三)のいわゆる「瀉仰」の著語が付されているものがあり、この点にも着目して考察を進める。考察を進めるにあたり、黄檗の一般的な歴史的、思想的位置付けとは、法嗣である臨済義玄(？〜八六六)を通してのみ、臨済の師として見られる傾向にある点を考慮に入れなければならない。¹⁰本論では、灯史における百丈と黄檗の機縁の変遷をまとめ、どのような方法をとって黄檗は発揚されているのかという点にも注目する。これらの考察を通じて真の黄檗像を探る一端としたい。

資 料

黄檗を知ることの出来る最も古い資料は『伝心法要』序(八五七年、大中十二)であるが、そこには百丈との機縁は載せられておらず、それが記されている資料を古い物から順に挙げる。書名の後ろに黄檗の伝記の記述のある巻数を記する。

百丈と黄檗の機縁を①「黄檗初参の話」②「不覺吐舌の話」③「大蟲の話」④「百丈野狐の話」⑤「開田の話」とし、それぞれが収録されている順番に挙げる。

■瀉仰の著語が付されているものは数字を白抜きにする。(例、②)

■「丈問、巍巍堂堂従何方来。師曰、巍巍堂堂従嶺南来。丈曰、巍巍堂堂当為何事。師曰、巍巍堂堂不為別事。便礼

「拜問曰」という修飾文が追加されている機縁は数字を網がけにする。(例、①)

九五二年(広順二)

九八八年(端拱元)

一〇〇四年(景德元)

一〇三四年(景祐元)

一〇三六年(景祐三)

一〇八五年(元豊八、序)

一一〇七年(大観元、序)

一一〇一年(靖国元)

一三三三年(紹興三以前)

一一六三年(隆興元)

一一八三年(淳熙十)

一二二二年(淳祐十二)

一三四一年(至正元)

一三六七年(至正年間)

一四八九年(弘治二)

一六〇二年(万曆三十)

一六三三年(崇禎六)

『祖堂集』〈十六〉黄檗章①

『宋高僧伝』機縁の記載なし。

『景德伝灯録』〈九〉黄檗章①③・〈六〉百丈章②

『伝灯玉英集』〈五〉黄檗章③①

『天聖広灯録』〈八〉百丈章②⑤③④①

『四家語録』〈二〉『洪州百丈山大智禪師語録』②⑤③④①

『林間録』〈上〉②①

『建中靖国統灯録』〈二〉黄檗章②

『宗門統要集』〈四〉黄檗章③⑤①・〈三〉百丈章②④

『隆興仏教編年通論』〈二十六〉黄檗章②

『宗門聯灯会要』〈七〉黄檗章②③⑤①・〈四〉百丈章④

『五灯会元』〈四〉黄檗章①③・〈三〉百丈章②④

『仏祖歴代通載』〈十六〉大中巳巳の項②

『新修科分六学僧伝』〈七〉黄檗章①③・〈六〉百丈章②

『禅宗正脈』〈二〉百丈章②④

『指月録』〈九〉黄檗章①③②⑤・〈八〉百丈章②

『教外別伝』〈六〉黄檗章①③・〈五〉百丈章②④

- 一六三三年（崇禎六） 『仏祖綱目』〈三十二〉黄檗章②①
 一六五三年（順治十） 『五灯厳統』〈四〉黄檗章①③・③④ 百丈章②④
 一六五五年（永曆九） 『祖庭指南』〈下〉黄檗章①③・③④ 百丈章②④
 一六九〇年（康熙二十九） 『宗統編年』〈十二〉黄檗章②①

①「黄檗初参の話」15/20。②「不覚吐舌の話」18/20。③「大蟲の話」12/20。④「百丈野狐の話」9/20。⑤「開田の話」5/20。（機縁の話に記載しない『宋高僧伝』は除く。）

以上の資料を列挙したが、管見の限り『天聖広灯録』までで、百丈と黄檗の機縁は出揃っている。そこで本論では、機縁の話を収録していない『宋高僧伝』、『景德伝灯録』を刪略して作られた『伝灯玉英集』をのぞき、『祖堂集』『景德伝灯録』『天聖広灯録』に収められる機縁を中心とし他の資料は補足として考察を進める。

本 論

第一節 「黄檗初参の話」

黄檗が百丈と初めて交わしたとされる問答を次に挙げる。本論文中ではこの問答のことを「黄檗初参の話」とする。

■ 『祖堂集』〈十六〉黄檗章 [612-613]

師遂依言而造百丈礼而問、從上相承之事、和尚如何指示於人。百丈良久。師曰、不可教後人断絶去也。百丈云、

我本將謂、汝是一個人。遂起入丈室、欲掩其戸。師云□□□□、某甲□來、只要這個印信足矣。丈廻言、若然者、他後不得辜負於吾。

■ 『景德伝灯録』〈九〉黄檗章[136b]

師後遊京師。因人啓發乃往參百丈。問曰。從上宗乘如何指示。百丈良久。師云。不可教後人斷絶去也。百丈云。將謂汝是箇人。乃起入方丈。師隨後入云。某甲特來。百丈云。若爾、則他後不得辜負吾。

■ 『天聖広灯録』〈八〉百丈章[410a-b]

黄檗問。從上古人、以何法示人。師良久。黄檗云。後代兒孫、將何傳授。師云、將謂、你者漢是箇人。便歸方丈。

■ 『五灯会元』〈四〉[Z. 138, 121b] 『指月録』〈九〉[Z. 143, 228b] 『教外別伝』〈六〉[Z. 144, 108a]

『五灯厳統』〈四〉[Z. 139, 201a] 『祖庭指南』〈下〉[Z. 148, 423a] といった後代のものになると、概ね『景德伝灯録』の「從上宗承如何指示。」という記述と同意の文章の前に、

丈問、巍巍堂堂從何方來。師曰、巍巍堂堂從嶺南來。丈曰、巍巍堂堂當為何事。師曰、巍巍堂堂不為別事。便礼
拜問曰

と、言う一文が挿入されている。また、『仏祖綱目』〈三十二〉[Z. 146, 510a] 『宗統編年』〈十二〉[Z. 147, 184a] では表中に示したようにこの語の後に「不覺吐舌の話」がつけられている。

この問答は、黄檗が百丈に嗣ぎ、そして百丈を超え馬祖の大機の用をつかんだ、とする立場からすると都合の良い

記述ではない。また、この記述では、黄檗が百丈に継ぐ筆頭の優れた弟子であるという立場も危うく成り兼ねない。この話は表面的には只、弟子が師に対して執拗に言説による伝法を期待する話のように見える。ただ、「祖堂集」等に見える「丈廻言、若然者、他後不得辜負於吾。」という一語がある為に辛うじて、百丈が黄檗を激励して嗣法を期待している点が窺える。しかし、「祖堂集」においては百丈との機縁はこれだけしか記載されておらず、また、大悟を得る場面も描かれてはいない。この話は嗣法についての機縁ではなく、まだ力の無い黄檗が百丈に相見をした時の逸話という見方が自然である。一方の黄檗と並び筆頭弟子であったとされる鴻山は、機縁が百丈章において二つ記載されており、一つの話では明確に鴻山が悟りを得、もう一つの話で働きを示す。¹³「祖堂集」におけるこの記載からは、黄檗が馬祖として百丈と繋がる系譜を嗣いで百丈の筆頭弟子であると読み取ることが難しい。むしろ鴻山が百丈の弟子の筆頭として相応しい記述である。

「黄檗初参の話」を列挙したのを見ると、時代が下るにつれて明らかに追加、修正が加えられていることが分かる。「建中靖国続灯録」等ではこの問答を無視しており、「五灯会元」等では黄檗が堂堂の体躯であり、大丈夫であったということをこの問答の前に付け足している。この一文を加えることにより、「五灯会元」等の黄檗の姿は『祖堂集』に於ける姿と違い、最初から大禅師の器を備えた弟子であった、ということが強調されている。このように、加筆者が都合の良い黄檗像を作り上げるため、修正、改変されたことが理解できる。¹⁴しかし、この話を改編するだけでは、黄檗の鴻山を超えた百丈の法嗣筆頭という立場を見ることはできない。後述するが、この「黄檗初参の話」に鴻仰の著語は当初から付されることは一貫してない。

第二節 「不覺吐舌の話」

黄檗が百丈の弟子代表として、また黄檗が百丈を超えて嗣法するということを決定づける逸話は、次に例示する話である。本論文中ではこの問答を「不覺吐舌の話」とする。

■ 「祖堂集」記載なし。

■ 「景德伝灯録」〈六〉百文章 [98a]

一日師謂衆曰。佛法不是小事、老僧昔再參馬祖被大師一喝、直得三日耳聾眼暗。時黄檗聞舉不覺吐舌。師曰、子已後莫承嗣馬祖去。藥云、不然。今日因師舉得見馬祖大機之用。然且不識馬祖、若嗣馬祖已後喪我兒孫。師云、如是如是。見與師齊、減師半德。見過於師、方堪傳授。子甚有超師之作。

■ 「天聖広灯録」〈八〉百文章 [409]⁽¹⁵⁾

黄檗到師處。一日辭云。欲禮拜馬祖去。師云。馬祖已遷化也。檗云、未審有何言句。師遂舉再參馬祖豎拂因緣。檗聞舉、不覺吐舌。師云、子已後莫承嗣馬祖去磨。檗云、不然。今日因師舉、得見馬祖大機之用。然且不識馬祖、若嗣馬祖、已後喪我兒孫。師云、見與師齊、減師半德。見過於師、方堪傳授。子甚有超師之見。後鴻山問仰山。百丈再參馬祖豎拂因緣。此二尊宿意旨如何。仰山云、此是顯大機之用。鴻山云。馬祖出八十四人善知識、幾人得大機、幾人得大用。仰山云。百丈得大機、黄檗得大用。餘者盡是唱道之師。鴻山云、如是如是。

『景德伝灯録』では「一日師謂衆曰」と、この話は大衆に向けて語られているが、『天聖広灯録』では「黄檗到師處、一日辞云。」と黄檗、百丈の二人だけの問答である。この修正はこの話に瀉山、仰山を登場させるためだけではないであろう。柳田氏は「三日耳聾する話は、大衆を相手に語られているから、瀉山は当初より同席していたはずである。黄檗のみが舌を吐くのは、当初から瀉山を不在とするので、二人を互角の弟子といいつつ、黄檗よりの作意であり、」と指摘している¹⁶。この話に黄檗よりの作意があることは認められる。しかし、『天聖広灯録』以降、瀉山と仰山の問答が付されているものは、文頭が「黄檗到師處。一日辞云。欲礼拜馬祖去。」と改変されており、そこには黄檗と百丈しかおらず、瀉山不在の辻褄は合わせられている。

また、『天聖広灯録』以降においてこの「不覺吐舌の話」の改編は、黄檗が初めて百丈に参じ詰め寄った時に発した「從上相承之事」に答える話と考えられる。「黄檗初参の話」において黄檗は、脈々と受け継がれてきた「從上相承之事」を百丈に問うたが、百丈は良久するだけであった。しかし、「不覺吐舌の話」では「馬祖已遷化也。檗云、未審有何言句。」と相承の事についての問に百丈は、「師遂拏再参馬祖豎拂因縁言」と馬祖に再参し三日耳聾になったことを話し答える。この答えは「黄檗初参の話」で黄檗が欲したものにほかならない。この為にも、大衆の前での説法ではなく、黄檗と百丈、一対一の問答でなければならぬ。こうしてみると、『天聖広灯録』における「不覺吐舌の話」は「黄檗初参の話」を『景德伝灯録』に比べより強く意識していると考えられる。『天聖広灯録』においてより明確に「黄檗初参の話」の答えとしてこの話が示されている。

この話に加えられ修正、加筆された理由。この点は須山氏も指摘しているところであるが、それは先述のように「黄檗初参の話」では黄檗を百丈の弟子代表とするには力が弱かったということが考えられる。それに加えて、「不覺吐舌の話」は、当初より明らかに黄檗と馬祖を結びつきをより強固にする意図があると考えられる。この黄檗と馬祖のつながりは、先に言及した、『祖堂集』においても既に見られる。しかし、この時点では馬祖に参じただけで、馬祖

の法云々は語られていない¹⁸⁾。それは、『景德伝灯録』以降においてである。柳田氏は『景德伝灯録』について「伝灯録」の百丈伝は、馬祖、百丈、黄檗、臨済という四家の法系を軸に、再編成されるのである。¹⁹⁾と見解を示している。『景德伝灯録』において馬祖の話を百丈が持ち出すのは不自然ではないが唐突である。『天聖広灯録』に見える「不覺吐舌の話」では、黄檗は自ら馬祖の元へ向かいたい旨を百丈に伝え、より円滑に話が進んでいる。このように、なぜ馬祖がここにおいて持ち出されるのか。それは、以下のことが考えられる。次節で考察する「大蟲の話」「百丈野狐の話」では黄檗は優れた見解を示し、それを百丈が印可している。この印可は黄檗が「超師の弟子」であるという意を含んでいる。しかし、これだけでは他の百丈下の法嗣との差別は明確にならない。黄檗ただ一人が正系の弟子であるということを知ることとする為には、百丈を超えたということも百丈自身にも語らせ、その理由を周囲が認める必要がある。これには百丈と同等以上の禅機を示さねばならず、その為には馬祖の法を得ることが必然的に導かれる。馬祖の法を得ることにより、百丈に嗣法することだけではなく、瀉山を含む他の法嗣と互角ではなく、弟子筆頭に位置したことを同時に意味する。

そして、『天聖広灯録』において瀉山と仰山の著語が付されることにより黄檗の立場が確固たるものであるということを一層際立たせている。²⁰⁾この機縁は後の灯史において百丈と黄檗の機縁を載せるもの全てに記載があり、また他の機縁に比べ字句の異動が大きいことからこの話の重要性の理解は容易である。

第三節 「大蟲の話」・「百丈野狐の話」

「大蟲の話」

■ 「祖堂集」記載なし。

■『景德伝灯録』〈九〉黄檗章 [136p-137a]

百丈一日問師。什麼處去來。曰大雄山下採菌子來。百丈曰。還見大蟲麼。師便作虎聲百丈拈斧作斫勢。師即打百丈一摑。百丈吟吟大笑便歸。上堂謂衆曰。大雄山下有一大蟲汝等諸人也須好看。百丈老漢今日親遭一口。

■『天聖広灯録』〈八〉百文章 [409p-410a]

師問黄檗、甚處來。檗云、山下採菌子來。師云、山下有一虎子、汝還見麼。檗便作虎聲。師於腰下取斧作斫勢。檗約住便掌師。師晚參上堂云、大衆、山下有一虎子。汝等諸人出入好看。老僧今朝親遭一口。後瀉山問仰山云、黄檗虎話作磨生。仰山云、和尚如何。瀉山云、百丈當時便合一斧斫殺。因什磨到如此。仰山云、不然。瀉山云、子又作磨生。仰山云、不唯騎虎頭、亦解把虎尾。瀉山云、寂子甚有險崖之句。

この話は『景德伝灯録』〈九〉に初めて著わされる話である。これも、前節に示した「不覺吐舌の話」と同じように『天聖広灯録』〈八〉からは瀉仰の著語が加えられている。これは、三重の評価である。黄檗と百丈、二人だけの問答であったものを、百丈一人が黄檗を認めたのではなく、上堂説法でこの話を持ち出すことにより、黄檗が傑出した弟子であることは誰もが認める事実となっている。その上に『天聖広灯録』からは瀉仰の著語が加えられることにより黄檗が「不覺吐舌の話」で得た、百丈の弟子の筆頭であるということがより強固にされている。この著語に対しては第五節において言及する。

「百丈野狐の話」

■『祖堂集』『景德伝灯録』それぞれ記載なし。

■『天聖広灯録』(八)百丈章 [410a]

師每上堂。常有一老人聽法。罷皆隨衆散去。一日留身不去。師問、立者何人。老人曰、某甲於過去迦葉佛時、曾住此山。有學人問、大修行底人還落因果也無。對云、不落因果。墮在野狐身。今請和尚、代一轉語。師云、汝但問。老人便問、大修行底人還落因果也無。師云、不昧因果。老人於言下大悟。告辭師云、某甲已免野狐身。住在山後。乞依亡僧燒送。師令維那白槌告衆。齋後普請送亡僧。衆皆愕然。齋後衆去山後。巖中果見一死野狐。積薪燒訖。師至晚上堂、舉前因緣次。黃檗便問、古人錯對一轉語、墮在野狐身、今人轉轉不錯、又且如何。師云、近前來。向汝道。槩近前。打師一掌。師云、將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。時瀉山在會下。作典座。司馬頭陀舉野狐話問典座、作磨生。典座以手撼門扇三下。司馬云、大麤生。典座云、佛法不是者箇道理。後瀉山舉黃檗問野狐話問仰山。山云、黃檗常用此機。瀉山云、汝道天生得從人得。仰山云、亦是稟受師承、亦是自性宗通。瀉山云、如是如是。

この一段の構成は先に見た「大蟲の話」とほぼ同じである。前半は百丈自身にあった事件。それを夜の上堂の時大衆の前で語り、そこで黄檗を大衆の前で称賛する。次にこの因縁をめぐる瀉山と司馬頭陀の問答があり、最後に瀉仰が著語して改めて黄檗と百丈の商量を賛嘆するという形式である。

この話は一見すれば理解のできることであるが、歴史的事実としてではなく道人を接化するための公案としての性質が強い。この話は因果の問題に触れる重要な公案として、表中以外、『禪宗頌古聯珠通集』(十)(一一七九年)『無門関』(二)(一一二八年)『禪門拈頌集』(六)(一五六八年)に管見の限り収録されている。この内『無門関』『禪門

拈頌集』の話には瀉仰の著語は付されていない。一方、灯史においては収録されているもの内で「祖庭指南」以外のものは全て瀉仰の著語を記載している。これだけで結論を急ぐことはできないが、内容を吟味することと合わせる、公案としてのこの話に瀉仰の著語はそれほど重要ではないことが考えられる。この話中の瀉仰が著語をする前の「將謂胡鬚赤更有赤鬚胡」というところ迄でこの公案で一番重要な「不落因果・不昧因果」の問題は十分に提起されている。²¹この後に付けられる瀉仰の著語はこの話に著語した多くの人々と違い、表現の上から「不落因果・不昧因果」についての著語であると読み取ることが難しい。むしろ黄檗のことに言及し「亦是稟受師承、亦是自性宗通。」というように黄檗の働きを認め、嗣法に対しての称賛と取る方が妥当である。以上のことから、公案としてのこの話の態度から考察するならば、瀉仰の著語というものは必ずしも必要ではないことが理解できる。

しかし灯史としての側面から見ると、「將謂胡鬚赤更有赤鬚胡灯史」までの部分で百丈が黄檗を認めることはもちろん、その上に著語内で瀉仰も称賛するということは百丈の法嗣の筆頭は黄檗である。ということ強調することは非常に都合が良い。公案としての側面からは、瀉仰の著語は重要ではないが、灯史としての側面からは瀉仰の著語というものは非常に重要である。このようにこの機縁には二つの側面があることが理解できる。

第四節 「開田の話」

■「祖堂集」「景德伝灯録」記載なし

■「天聖広灯録」〈八〉百文章 [409b]

師因普請開田迴問、運闌梨開田不易。檠云、衆僧作務。師云、有煩道用。檠云、爭敢辭勞。師云、開得多少田。

槃作鋤田勢。師便喝。槃掩耳而出。

この話も先の「百丈野狐の話」と同様に『天聖広灯録』から収められるようになった機縁である。そして「黄檗初参の話」と同様に一貫して著語が付されるということはなかった。また、この話は管見の限り『天聖広灯録』『四家語録』『宗門統要集』『宗門聯灯会要』『指月録』のみにしか記載されていなく、他の機縁に比して極端に扱いが少ない機縁である。内容においては黄檗の禅機を暗示話ではあるが、百丈が黄檗を称賛したということは語の上から読み取ることが難しい。また公案として利用されることも管見の限りは無く、必然的に百丈と黄檗の機縁としては公案としての側面、灯史としての側面、どちらにとっても 多少重要性に欠ける話である。この為に、灯史の中で極端に扱いが少ないと考えられる。このようにこの話は他の『景德伝灯録』以降に加えられた機縁と比べ、理解し易いものではない。それに、『天聖広灯録』に初めて記載されたことは疑問がおこるところである。

これまでの考察により他の機縁は「超師」という鍵を持って何らかの承継、布石が踏まえられて編まれていることが理解できた。また、次節で考察する鴻仰の著語については黄檗に対する記述と臨済に対する記述の類似点を二点挙げる事ができた。そこで考えられる仮説は、臨済の機縁との関連性である。その機縁とは、次に示すものである。

【景德伝灯録】(十二) 臨済章 [207a上醍醐寺本東禅寺版、207b東寺本開元寺版、共に同じ]

黄蘗一日普請鋤茶園。黄蘗後至。師問訊按鏹而立。黄蘗曰、莫是困耶。曰、纔鏹何言困。黄蘗舉拄杖便打。師接杖推倒和尚。黄蘗呼維那、維那拽起我來。維那扶起曰、和尚爭容得這風顛漢無禮。黄蘗却打維那。師自鏹地云、諸方即火墜、我這裏活埋。鴻山問仰山、只如黄蘗與臨済、此時意作麼生。仰山云、正賊走却、羅賊人喫棒。

これは黄檗の「開田の話」を彷彿させる機縁である。「開田の話」では黄檗は百丈の喝に耳を覆い行ってしまい、臨済は黄檗を押し倒す。それまでの動きはほぼ同じである。この二つの話を見比べると、臨済の働きが際立ち、瀉仰の著語も付されている。しかし、これだけのことで、臨済の姿を強調するためだけにこの「開田の話」が加えられたとは結論付けることはできない。しかし、子弟に似通った話があり、それも灯史上では弟子臨済の方が先にこの話が現れることは非常に興味深い点である。この、二つの話のつながりについて、また「開田の話」のより深い理解については今後の課題とする。

また、この話からは百丈が重要視をしていたとされる「作務」に対する姿勢23ということを黄檗との機縁にも取り入れられている点が指摘することが出来る。

第五節 瀉山仰山の著語について。

百丈と黄檗の機縁についての考察を進めると、百丈と黄檗の嗣法に関して、瀉仰の著語というものが非常に重要な役割を果たしていることが改めて確認できる。その著語の変遷過程に着目すると、「黄檗初参の話」には一貫して著語が付されることはない。これは先に指摘したところであるが、この話は黄檗が超師の力を持っているという形式にはどのように解釈しても当てはめられず、この話に著語をつけることが難しい。故に「巍巍々」という一文を追補していることが推測できる。「開田の話」も同く一貫して瀉仰の著語が付されることはない。理由は「黄檗初参の話」と同じことが考えられ、そしてその結果と考えられるが、前述のように他の機縁に比して極端に扱いが少ない。「不覺吐舌の話」「大蟲の話」「百丈野狐の話」については、それぞれ「天聖広灯録」より著語が付される。「不覺吐舌の話」

だけは、前述したように機縁の中では特に重要であるが、これらの話の構造は大まかには同じであり、全て百丈が黄檗を認め、それを瀉仰が称賛して著語を付するというものである。「不覺吐舌の話」と、「大蟲の話」「百丈野狐の話」の機縁により黄檗が百丈を嗣ぐ正系であり、必然的にそれを認める瀉仰が暗に傍系としての地位に甘んじているという形になる。

瀉仰の著語に関しては黄檗に付した著語と臨済に付した著語が非常に似通っているものがあることが指摘できる。

■ 『天聖広灯録』(八) 百文章 [409b-410a]、¹⁾「大蟲の話」の瀉仰の著語。

後瀉山問仰山云、黄檗虎話作磨生。仰山云、和尚如何。瀉山云、百丈當時便合一斧斫殺。因什麼到如此。仰山云、不然。瀉山云、子又作磨生。仰山云、不唯騎虎頭、亦解把虎尾。瀉山云、寂子甚有險崖之句。

■ 『景德伝統録』(十一) 臨済章 [206a上 醍醐寺本東禪寺版、206b 東寺本開元寺版、共に同じ] 臨済大悟の機縁に付される瀉仰の著語。

後瀉山舉此話問。仰山云、臨済當時得大愚力得黄蘗力。仰山云、非但騎虎頭、亦解把虎尾。

このようにほぼ同じ表現がなされている。また、黄檗と臨済の機縁に付する瀉仰の著語が、百丈と黄檗の機縁における百丈の発言と全く同じ部分がある点が指摘できる。先に考察した、『景德伝灯録』(十) 百文章「不覺吐舌の話」における百丈の発言と、『天聖広灯録』(十) 臨済章の臨済が黄檗の下を辞する時の問答に付される瀉仰の著語の一部がそれである。この二か所に「見与師齊、減師半徳。見過於師、方堪伝授。」という全く同じ語が使用されている。

この相差点から柳田氏は「すべての機縁が、臨済の師として、あるいは祖として、会祖としての資格で、再編され

てくる。」と指摘している。この点に対してはより深い考察を要するが、ここでは、『景德伝灯録』における黄檗の機縁が先にあり、それを受けて『天聖広灯録』の臨済の記述が編纂されたと考える方が自然である。

ここで、百丈と瀉山の機縁について触れる。前述したように瀉山には『祖堂集』〈十四〉百丈章[537]において二つの機縁が示されている。

師見瀉山回夜深來參次、師云你与我撥開火、瀉山云無火、師云、我適來見有、自起來撥開、見一星火夾起來、云、
這個不是火是什麼。瀉山便悟。

師与瀉山作務次、師問、有火也無。對云、有。師云在什麼處。瀉山把一枝木吹兩三下、過与師。師云如虫喰木

先の機縁では明確に悟りを得たと記されている。そして、二つ目の機縁では最初の機縁とほぼ同じ問に対して百丈を満足せしめる働きを示している。この二つの機縁は最初の機縁で瀉山が悟りを得、次の機縁ではその働きを示すという構造になっている。黄檗の『祖堂集』での扱いでは、百丈に落胆された機縁が一つあるのみである。これが、『景德伝灯録』『天聖広灯録』と編纂され、最終的には百丈と黄檗の機縁は以上で考察したように五つに増加している。その内で百丈が黄檗を認めた機縁である「不覺吐舌の話」「大蟲の話」「百丈野狐の話」という三つには瀉山の著語が付されたのは確認した通りである。

これに対して百丈と瀉山の機縁の増加は、以下に示す二つがある。

■ 『景德伝灯録』〈六〉百丈章 [984b]

師上堂云、併却咽喉臂吻速道將來。瀉山云、某甲不道請和尚道。師云、不辭與汝道、久後喪我兒孫。五峯云、和尚亦須併却。師云、無人處斫額望汝。雲巖云、某甲有道處請和尚舉。師云、併却咽喉臂吻速道將來。雲巖曰、師今有也。師曰、喪我兒孫。

■ 『景德伝灯録』(九) 瀉山章 [333a-b]

時司馬頭陀自湖南來。(百丈謂之曰、老僧欲往瀉山可乎。司馬頭陀參禪外蘊人倫之鑒。兼窮地理。諸方湖院多取決可。)對云、瀉山奇絶可聚千五百衆、然非和尚所住。百丈云、何也。對云、和尚是骨人、彼是肉山、設居之徒不盈千。百丈云、吾衆中莫有人住得否。對云、待歷觀之。百丈乃令侍者喚第一坐來。(即華林和尚也。)問云、此人如何。頭陀令警欵一聲行數步。對云、此人不可。又令喚典坐來。(即祐師也。)頭陀云、此正是瀉山主也。百丈是夜召師入室。囑云、吾化緣在此、瀉山勝境汝當居之嗣續吾宗廣度後學。時華林聞之曰、某甲忝居上首、祐公何得住持。百丈云、若能對衆下得一語出格當與住持。即指淨瓶問云、不得喚作淨瓶、汝喚作什麼。華林云、不可喚作木椀也。百丈不肯。乃問師。師踢倒淨瓶。百丈笑云、第一坐輪却山子也。遂遣師往瀉山。

先に示した百丈章にある機縁は、百丈が上堂しての間に瀉山、五峯常觀、雲巖曇晟、の三名それぞれが見処を示した話である。この話では瀉山の見処に対して百丈は「久後喪我兒孫。」と厳しい語を呈する。次に瀉山章にある機縁は、瀉山がまだ百丈下で典座であった時、司馬頭陀に認められ、そして淨瓶を使った問いに対する見処を百丈に認められ、瀉山へ赴くきっかけとなった話である。

これだけで結論を急ぐことは出来ないが、黄檗の機縁の増加は百丈との嗣法をより明確に弟子の筆頭としての立場を堅固にするものであった。それに対し瀉山に加えられた機縁は、一方は、百丈が瀉山に対し法を嗣ぐに相応しい弟

子であると讃嘆する話であるが、もう一方は称賛されているとは言えない話である。増加した機縁の話の数、質においても、黄檗の機縁の増加とは明らかに意図が違うことが理解できる。この点に対しては、より細密な考察を要する。灯史における瀉山の記載から考えられる点をもう一点挙げる。

■『祖堂集』(十一) 瀉山章 [605]

師有時謂衆曰、是汝諸人只得大識不得大用。有一上座、在山下住。仰山自下来問、和尚与摩道、意作摩生。上座云、更舉看。仰山舉未了、被上座踏倒。却歸来、舉似師、師哂而笑。

このように、瀉山と仰山の機縁がある。ここでは瀉山は大識を得ている者はいるが、大用は得ていないと言う。この話を仰山が山の下に住む上座に話し「踏倒」されることにより「大用」を示される。『祖堂集』における「大識」は『景德伝灯録』では「大機」に改められており、これは「大機」「大用」についての話であることが理解できる。前考したように「不覚吐舌の話」に『天聖広灯録』以降付される瀉山の著語では、仰山が、「百丈得大機、黄檗得大用。余者尽是唱道之師。」と瀉山の問に答え、瀉山はこの語に満足して「如是如是。」と応える。この著語は、『祖堂集』から始まる、今採り上げた瀉山が大衆に向けて言った「是汝諸人只得大識不得大用。」という語を受けていると考えられる。瀉山が大衆に向けて誰も得ていないという大用を「不覚吐舌の話」では、仰山が馬祖下の八十四人の善知識の内、黄檗のみが得たと評す。これは臨済下にとつては非常に都合の良い著語である。『天聖広灯録』では瀉山の章自体がないため確証は出来ないが、「不覚吐舌の話」に加えられた瀉山の著語は、瀉山の上堂の語を意識していた可能性が高い。それは、『景德伝灯録』『天聖広灯録』の中で「大機」と「大用」を分けて論じているのはこの二つの話の中のみであることから考えられる。『五灯会元』に至っては「不覚吐舌の話」に付される瀉山の著語と瀉山が大衆に

向け大機大用を説く話の両方を収録している。繰り返すと、この点は単なる偶然の一致とは考えにくく、これまでの考察を踏まえるならば、先にも述べたように黄檗像を修飾する、この湧仰が付した「大機」「大用」の著語は、先の湧山の上堂を受けたと考えられる。

また、「百丈野狐の話」に付された湧仰の著語については先に考察を加えたが、付け加える点として「山云、黄檗常用此機。」とあるが、この「機」は「大機大用」のこと即ち「禪的な働き」を意味しており、「不覺吐舌の話」で用いられている「大機」と「大用」とは分けて考えねばならない。

以上の考察を通じ、臨済に付したものと相似した著語、湧仰の機縁を踏まえた著語、機縁における百丈、黄檗の語を引用した著語、というように様々な機縁を合わせ、著語を付していることが理解できる。そして、それぞれの著語は「天聖広灯録」から付されている。これは、法嗣である臨済には「景德伝灯録」においてすでに湧仰の著語があることを考えると不自然である。その臨済に付された著語について石井氏は「祖堂集」「臨済録」「景德伝灯録」それぞれに収められる黄檗と臨済の機縁を比較し、付される湧仰の著語の流動性を指摘する。^⑧

湧仰の著語ということに着目して考察すると、湧仰の著語がいかに黄檗の立場発揚に貢献しているかが理解できる。その著語は、百丈と黄檗の機縁にある「はたらき」に著語を加えるというよりも、黄檗が百丈を超える弟子であるということを称賛する性格が強く表れている。

結論・今後の課題

百丈と黄檗の機縁をそれぞれ考察することで、それら機縁の中に一つの共通点が内包されていることに気付かさ

れる。それは「超師」である。ただ黄檗を百丈の法を得た禪匠として灯史は伝えているのではなく、「百丈を超える」という意を『景德伝灯録』以降では含まれている。『祖堂集』に唯一収録されている「黄檗初参の話」には「超師」という意は含まれていない。しかし、以上で考察したように「不覺吐舌の話」では、『景德伝灯録』以降、「得見馬祖大機之用。」というように馬祖が持ち出され、黄檗は馬祖につなげられる。これは、黄檗が百丈を超える、ということとを明確にする有効な表現であったことが考察により導かれた。そして結論として、百丈が「見与師齊、滅師半徳。見過於師、方堪伝授。子甚有超師之見。」と称賛する『天聖広灯録』では、それに加えて湧仰も「百丈得大機、黄檗得大用。余者尽是唱道之師。」と超師の著語を付す徹底した加乗がなされていた。「大蟲の話」においても『景德伝灯録』に「大雄山下有一大蟲汝等諸人也須好看。百丈老漢今日親遭一口。」と百丈が讚嘆するように当初より超師の意が含まれ、「百丈野狐の話」にも「將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。」と黄檗の禪境を証する百丈の語があり、その上に、仰山が「亦是稟受師承、亦是自性宗通。」と師資相承したというだけではなく、自己自身から得た悟りの旨を述べた。と、百丈を超える働きが黄檗にはあることを著語し強調している。このように、黄檗の機縁の多くに「超師」という鍵が含まれている。

しかし「超師」の意を含んでいると明確に判断することが出来ない「黄檗初参の話」と「開田の話」があった。まず、「開田の話」であるがこれは、先に考察したように、他の機縁、湧仰の著語の性質ということを総合して考えると臨済との機縁にたいする布石ではないかという仮説が立てられた。黄檗の機縁は「超師」の立場から編纂、改編をなされていた。臨済の黄檗との機縁も多くその傾向が見られる。「超師」ということが黄檗、臨済の機縁を構成する鍵になっていることは確かである。この点をより深く掘り下げ、またこの話に含まれる黄檗の禪的な働きを考察し、この「開田の話」に取り組む作業を今後の課題とする。いずれにせよ、この話は機縁の中では扱いが極端に少なく、この事実が黄檗の機縁が、容易に理解可能な「超師」を鍵としていることを示していると言える。

もう一点の「超師」を含まない機縁である「黄檗初参の話」、この話が他の機縁と性格を画するものであるのは「祖堂集」から著わされていることによると考えられる。「祖堂集」とそれ以降の灯史の性格を踏まえ、黄檗と馬祖についてを考察すると、「不覺吐舌の話」では、馬祖の存在を黄檗の「超師」の立場を明確にする為に効果的に使用されていた。この「不覺吐舌の話」において「得見馬祖大機之用」と表現された馬祖と「祖堂集」において「黄檗和尚告衆曰、余昔時同参大寂道友、名曰大愚。」と表現された馬祖は違う性質のものである。

このことから、「祖堂集」が編まれた時点では黄檗について超師の意を含んだ記載はされていないことが理解できる。ここでの馬祖との繋がり、そして「祖堂集」から収録され他の機縁と性格を画する「黄檗初参の話」、これは真の黄檗像を探るに非常に重要なものであると考えられる。この点に軸を置き捉え直すことを課題とする。また、瀉仰の著語とは黄檗を賛じる傾向の強いものであった。今後は、灯史からの考察だけではなく本稿では欠いた『伝心法要』『宛陵録』等における思想の側面から考察することも課題とする。

以上から、あらゆる手段が用いられ黄檗の百丈との嗣法、黄檗像、は修飾されていることが改めて理解できた。これは、馬祖・百丈・黄檗・臨濟という系譜が正系のものであり、引いては臨濟を臨濟宗の祖たらしめる為の加筆、修正の産物である。ということに繋がっている。

注

(1) 『祖堂集』[612]

後遊上都、因行分衛、而造一門云、家常。屏後有老女云、和尚太無厭生。師聞其言、異探而拔之云、飯猶未得、何噴無厭。女云、只這个、豈不是無厭。師聞駐而微笑。阿婆觀師容儀堂堂、特異常僧。遂命入内、

供以齋。食畢、詢問参学行止。師不能隱、竭露見知。阿婆提以再举微闕。師則玄門頓而蕩豁。師重致言謝、擬欲師承。阿婆曰、吾是五障之身、故非法器。吾聞江西有百丈大師、禪林郢匠、特秀群峰。師可詣彼参承。所貴他日為人天師。

『林間録』(上) [Z.148.591a-b] におけるは、以下の

ように馬祖を示される。

斷際禪師初行乞於雒京。吟添鉢聲、一嫗出棘扉問曰、太無狀足生。斷際曰、汝猶未施、反責無狀何耶。嫗笑掩扉。斷際異之。與語。多所發樂。辭去。嫗曰、可往南昌見馬大師。斷際至江西。而大師已化去。聞塔在石門遂往禮塔。時大智禪師方結廬塔傍。因敘其遠來之意、願聞平昔得力言句。大智舉一喝三日耳聾之語示之。斷際吐舌大驚。相從甚久。暮年始移居新吳百丈山。考其時、嫗死久矣。而大宋高僧傳曰嫗祝斷際見百丈非也。

(2) 本稿で使用する「嗣法」の定義は一般的に禪家で使用される釈迦を始めとして法統を嗣続することであるが、ただ教えを受けたというのではなく、師の下で印可を受け法を嗣ぐことである。

(3) 本稿で使用する「祖堂集」は「祖堂集」大韓民国、海印寺藏版、影印本、一九九四年、禅文化研究所
 『景德伝灯録』は『景德伝灯録』（福州東禅寺版）、一九九〇年、禅文化研究所（東寺藏福州東禅寺版）
 『天聖広灯録』は『宋藏遺珍 寶林傳・傳燈玉英集、附録・天聖廣燈録』、禅学叢書之五 柳田聖山編、一九七五年 中文出版社（知恩院藏福州開元寺版）をそれぞれ使用し □内に頁数を記する。

(4) 元刊本『景德伝灯録』第九末の『伝心法要』には「百丈之子、西堂之姪。」とある。

(5) 須山長治「黄檗希運の語録 百丈懷海との機縁」『印度学仏教学研究』六十六（三三一—二）一九八五年、六〇六頁、

「禅宗ではやかましい嗣法關係に対して、記録者が句意を取り違えたりあるいは曖昧な表現を使うことがあり得ようか。」

(6) 『景德伝灯録』(九) [370]にもほぼ同意の一文あり。しかし、ここでは「得馬師正眼者、止三兩人。」とあり、百丈の名が挙がっていないことも問題はない。ここで帰宗智常の名を挙げるのは、法嗣の大愚が後に黄檗と臨済の機縁に重要な役割を果たすことと關係があるのであろうか。この点は今後の課題とする。

(7) 『景德伝灯録』(十六) 百文章 [986]、『古尊宿語録』黄檗の章 [Z. 1181806]には、「得見馬祖大機大用」とある。

(8) 『林間録』(十) [Z. 148604a]「黄檗悟馬祖之意而嗣百丈。故百丈嘆以為不及也。」

(9) 『景德伝灯録』(六) 百文章 [98a]、「既處之未期月。玄參之資四方麤至。即有鴻山黄蘗當其首。」

(10) 入矢義高・訳注 柳田聖山・解説『伝心法要・宛陵録』『禅の語録八』一九六九年 筑摩書房、一六四頁、「後になると黄檗はその弟子の臨済を通して、臨済禅の源流としてのみ見られ、その独自の歴史的位置付けを失う傾向となる。」柳田聖山『柳田聖山集第二巻・

- 禪文献の研究(上)』二〇〇一年 法蔵館、三六五頁、
「瀉山と黄檗を上首とするのは、二人がのちに瀉仰と
臨済の祖となるため、百丈との機縁も、必然そう
した視角で再編されることとなる。」三六六頁、「黄
檗が百丈を超えて馬祖につぐほどの、すぐれた弟子
であったとするのは、かなり露骨な作意といえない
か。」と柳田氏は述べている。
- (11) 注(1)、で示したように他との相違点が大きい。記
述の差異は『林間録』そのものの特殊性に依るもの
であると考えられる為、『林間録』、またその記述に
ついては課題とする。
- (12) 後述するが、巍巍堂堂とした黄檗像が『五灯会元』
以下では加上されている。
- (13) 『祖堂集』(十四)百文章 [537]
師見瀉山回夜深來參次、師云你与我撥開火、瀉山云
無火、師云、我適來見有、自起來撥開、見一星火夾
起來、云、這個不是火是什麼。瀉山便悟。
- 師与瀉山作務次、師問、有火也無。對云、有。師云
在什麼處。瀉山把一枝木吹兩三下、過与師。師云如
虫喰木。
- (14) 柳田聖山、前掲書三六七頁、『伝灯録』以下のテキ
ストが、すでに三日耳聾の話を予想して、最初の問
答に修正を加え、あるいはほとんど無視しているこ
とが判る。」と、柳田氏は指摘する。しかし、修正
無視は認められるが「三日耳聾を予想して」とする
よりも、百丈の法嗣の上首として相応しくない話で
ある為の修正、無視と考える方が自然である。
- (15) ここでは「三日耳聾」は無視されているのではなく、
直前 [49a] に於いて記されている。
- (16) 柳田、前掲書三六九頁
- (17) 須山長治、前掲論文六〇九頁「禪宗史としてはこの
機縁(黄檗初參の話)では百丈と黄檗を結びつける
決定的な要素とはならなかったと思われる。それ故
に、「再參馬祖豎拂因縁」の問答を登場させたのでは
あるまいか。」
- (18) 尾崎正善「瀉山仰山の著語について 瀉仰と初期臨済
下の關係について」『宗学研究』、三十一一九八八年、
二〇一頁、『祖堂集』の記された段階での臨済下の
動きとしては、現在のような系譜の正統性を主張す
る以外の動きがあったことは確かであろう。」
- (19) 柳田、前掲書三六六頁
- (20) 尾崎、前掲論文二〇二頁、「瀉仰両者の臨済に対する
著語は、黄檗・臨済に対する積極的な関心による結
果であるとは考えにくい。それら著語は、臨済下が
江西において教線を拡大して行く為、必要不可欠
のものであったから、意図的に現在のように残った
と見るべきである。」

- (21) 鈴木哲雄「百丈野狐」話についての考察』『愛知学院大学文学部紀要』、二十五 一九九五年、三頁、「前半において不落因果・不昧因果の重大な公案が示される。更に後半部分で不錯の問題、与掌拍手の問題、胡鬚赤の問題が生じて、前半の話と交叉して、この公案は非常に複雑な内容を持ったものとなった。」
- (22) 『禅宗頌古聯珠通集』(十)「百丈野狐」の話には六十二名が著語を付している。
- (23) 『天聖広灯録』(八)「[21]」、師凡作務執勞。必先於衆。」師辨黄檗、壁問什麼處去。師云、不是河南、便是河北。壁便打。師約住與師一掌。壁大笑喚侍者、將百丈先師禪板几案來。師云、侍者將火來。黄檗云、雖然如是、汝但將去、已後坐却天下人舌頭去在。後瀉山舉此話問仰山、臨濟莫辜負他黄檗也無。仰山云、不然。瀉山云、子又作麼生。仰山云、知恩方解報恩。瀉山云、從上古人還有相似底也無。仰山云、有、祇是年代深遠、不欲舉似和尚。瀉山云、雖然如是、吾且不知、子但舉看。仰山云、祇如楞嚴會上阿難讚佛云、將此深心奉塵刹、是則名為報佛恩、豈不是報恩之事。瀉山云、如是如是。見與師齊、滅師半德、見過於師、方堪傳授。 [935b]
- (25) 柳田、前掲書三八五頁。また柳田、前掲書三二六九頁、「百丈と黄檗の機縁に、瀉仰の評論を加えるのは、『臨濟録』をふまえての加上とみるほかはない。」とあり、
- 繰り返し主張されている。
- (26) 古賀英彦『研究報告第八冊・訓注祖堂集』二〇〇三年 花園大学国際禅学研究所 六六〇頁。「上座踏階上座が大用を仰山に示したところ。」
- (27) 『景德伝灯録』(十一)、九峰慈慧章 [986a]「福州九峯慈慧禪師。初在瀉山遇祐禪師上堂云。汝等諸人只得大體不得大用。師抽身出去。瀉山召之。師更不迴顧。瀉山云。此子堪爲法器。」とあり、「大體」となっている。九峰は「祖堂集」には見えず、この機縁は「景德伝灯録」より記される。
- (28) 柳田、前掲書三八四頁、元來は黄檗が盧山をたたえた、「馬祖下八十四人の善知識云云」まで、瀉山が当の黄檗をほめる言葉となるのである。」
- (29) 後瀉山舉問仰山云。鑿頭在黄蘗手裏。爲甚却被臨濟奪却。仰山云。賊是小人智過君子」 [207]
- 「瀉山問仰山。只如黄蘗意作麼生。仰山云。正賊走却。羅賊人喫棒。」 [207]
- 「瀉山舉問仰山。只如黄蘗意作麼生。仰山云。兩彩一賽。」 [207]
- 「瀉山舉問仰山。且道黄蘗後語但囑臨濟。爲復別有意味。仰山云。亦囑臨濟亦記向後。瀉山云。向後作麼生。仰山云。一人指南具越令行。南塔和尚注云。獨坐震威此記方出。又云。若遇大風此記亦出。瀉山云。如是如是。」 [208]

(30) 石井修道「瀉仰宗の盛衰(一)」『駒沢大学仏教学部論集』、十八 一九八七年、一一五頁

(31) 柳田聖山「馬祖禪の諸問題」『印度学仏教学研究』、三三(一七—二) 一九六八年、三十五頁。「黄檗と臨濟の関係を正統なものとし、あたかも馬祖以後の禪の主流が、臨濟によって大成されたと見ようとする意図がうかがわれる。」

〔付記〕二〇〇八年十一月二十九日、花園大学にて行われた禅学研究会学術大会において本稿の発表時、石井修道先生、衣川賢次先生に御指摘、御指導を頂くことができた。茲に記して感謝の意を捧げる。